救って セイントシスター
Save Me Saint Sister
小説 筆祭競介
挿絵 のりたま
二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

序章　天才聖少女の初陣　006
第一章　黒髪の少年剣士　021
第二章　邪神、暴走！　045
第三章　戦乙女とはじめてクエスト　089
第四章　ロリっ娘エルフとトリプルバトル　122
第五章　バトルシスターと邪神退治　153
第六章　ハーレムパーティでクラスチェンジ　200
終章　物語の始まり　249

登場人物紹介

Characters

ディアドラ

女だてらに大剣を軽々と自在に操る、大陸最強と謳われる女戦士。抜群のプロポーションを誇る妖艶なお姉さん。

リオン

古くから森の守り人として過ごしているエルフ。見た目も言動もまるきり子供だが、サトルにとっては上司。

セリカ

かつてはエリートシスターだったが、ある失敗をきっかけにサトルの保護者となった少女。清楚で穏やかな聖女。

サトル

幼い頃に邪神召喚の生け贄にされかけたところをセリカに助けられた少年。剣士を目指して修行中。

『第二章　邪神、暴走！』より

「ふわあっ⁉　え？　ぼ、僕……ど、どどうなっちゃうの？」
貧血でも起こしたように頭がクラッとした瞬間、全身に漲っていた〝黒い力〟が身体の下の方に降りていく。
「心配ないのだ。悪い子の元はみ～んなココに集めちゃう予定なのだ」
リオンがブンブン指先を振りながら指したのは、サトルの股間だった。確かにソコに向かって全身の力――というか血流が集中していく感覚がある。
直後、それまで凛々しかったセリカの顔が、急にポムっと真っ赤になる。対して自分を背中から羽交い締めにしているディアドラは、肩から下を向き「まあ」と妙に嬉しそうな声を上げていた。対象的な二人のリアクションを不思議に思い、視線を下に向けてみる。
「……な、なんで？」
ズボンがテントを張るように張り詰め、大きく盛り上がっていた。
どうやら勃起しているらしい。この状態があまり他人に見せるべきでないことは、さすがにこの歳なのでボンヤリと認識し始めている。
実は最近、朝目覚めるとこのようなコトになっているのが毎日だった。しかし同年代の子供がいない寂れた山村で暮らすサトルには、この手の詳しい知識を得る機会が皆無である。何しろ一緒に暮らしているのが敬虔なシスターで、日中顔を合わせている相手が天真爛漫なロリっ娘エルフという環境なのだ。

「リ、リオンさん！　なんなんですかコレは！」
自分の気持ちを、育ての母が代弁してくれる。
「サトルの中でブイブイ言わせてる悪い元をとにかく抜いちゃうのが一番手っ取り早いって思ったのだ。それに悪い子オーラは、男の子がハアハアするのと混じりやすいのだ」
「なるほど。暴走してた邪神の邪気を、一旦坊やの性欲と一体化させたってことね」
「その通りなのだ。あとはサトルがどっぴゅんすれば、スッキリするのだ」
「つまり坊やを射精させれば、それと一緒に邪神も抜けるっこと？」
「うーん。たぶんそこまでは無理っぽいのだ。でも、とりあえず今暴れまくってる悪い子オーラは、なんとかなるって思うのだ」
「なるほどね」
やはりこの二人、つい先ほど出会ったばかりとは思えないほど息が合ってる。しかし、何が『なるほど』なのか性の知識のないサトルにはチンプンカンプンだ。対してセリカは無言のままでも、話の内容は理解したようで顔をさらに赤くしている。
「ということで、今からサトルをヌキヌキしちゃうのだぁあぁぁっ！」
ロリっ娘エルフはまるで前日に仕掛けをしていおいた罠に、どんな昆虫がかかっているかを確かめるようなワクワク顔で、こちらのズボンの紐に手をかけてきた。
「わっ、なっ、ややややめてよ隊長！」

サトルは反射的に腰を捻ってそれを避ける。
「こらっ！　動いちゃだめなのだ！　隊長命令なのだっ！」
珍しく上司から強く命令され、股間を隠そうと上げていた片足を下ろしてしまう。
「う、うううぅ……」
皆の視線に剥き出しの股間が晒された。
ちょろっと生えた陰毛の根元から、ヘソに付きそうほど隆々と反り返る男根。肉色は赤みを増した肌色で黒ずみはまったくない。その綺麗な色合いは、おしっこをする以外の目的で使ったことがない証である。
「ほわわっ。すげーでっかいのだ。こいつはキングサイズなのだぁ」
リオンが長い耳をピンと立て、元より大きな瞳をさらに丸く見開いている。
同じセリフを昔、二人で虫取りをしていて、掌サイズのカブトムシを発見した時に聞いた覚えがある。ロリっ娘エルフはさらに跪(ひざまず)き、その愛らしい美貌を近づけて、寄り目になって真上を向いている肉先を見つめてきた。
「でも……大きさはこんなに大人なのに、先っちょはお子ちゃまなのだ」
真横で顔を真っ赤にし、横を向いているシスターの裾をグングンと引き、ほらほらと見るように催促し始める。
「……っ……」

対してセリカはさらに顔を横に向けた。

――お、お子ちゃまっ……って、な、なんのこと？

サトルは改めて己の股間を見下ろした。肉棒の頂点付近は亀の頭のような形状で盛り上がっていて、根元から続く赤みがかった肌色が先端まで続いている。そして先端部分で余った皮がキュッと巾着袋の口状になって窄まっていた。

リオンの寄り目を見る限り、どうやらこの余った皮部分を指して〝お子ちゃま〟と言っているらしい。背後のディアドラもサトルの肩に顎を乗せるようにして、顔の横から股間を見下ろしてくる。

「あ～ん。こっちも鍛えがいがありそうねぇ。名刀の可能性を感じさせるわぁ」

サトルの羽交い締めを解き、前に回ってこようとするヴァルキリーを、ロリっ娘エルフが慌てて制する。

「赤毛のお姉さんは動いちゃだめなのだ！　悪い子オーラをココに集める魔法をかけた時、お姉さんも中にいたから、下手に動くと魔法が解けちゃうのだ」

「そ、そんなぁ」

ディアドラが心底、残念そうな溜め息を漏らす。吐息に滲む無念の深さはサトルの旅の同行を、セリカに反対された時とは比較にならない。落胆する紅の女戦士をよそに、緑色のツインテールが膝で歩いて股間ににじり寄ってくる。

「な、何をする気なの？」
「もう、わかってくるくせにぃ。隊長に恥ずかしいこと言わせないで欲しいのだ」
まったく恥ずかしがってる素振りを見せず、うぷぷっと笑い太腿をツンツンしてくる。
「い、いや……あの、……本当にあの僕……どーなっちゃうの？」
少年のマジ質問に、職場の上司が小首を傾げた。
「サトルは、自分でシコシコしたことないのか？」
「……し、しこしこ？」
なんだかとっても卑猥な擬音のような気がするが、何を指して言ってるのかわからない。
キョトンとしている少年を見て、エルフもその幼い美貌をポカンとさせる。
一瞬、微妙な空気が二人の間に流れたが、
「わかったのだ！　全部、この頼りになる隊長様と――」
リオンは隣に立ち、胸元を隠したままそっぽを向き続けていたセリカを強引に引き寄せ、跪かせていた。そして勢いよく頬同士を重ねる。
「シスターセリカにお任せなのだ！」
「ちょっ、な、なななっ、あの、わ、わたしぃ⁉」
いきなり少年の股間を真正面に見せられて、セリカが声を上擦らせる。胸を隠していない片手をわたつかせ、瞳の激しいキョドつきぶりも凄まじい。若くして村の長老たちから

頼りにされている、いつもの落ち着きぶりは見る影もなかった。
「今はサトルのピンチなのだ。サトルが悪い子にならないようにするためなら、命をかけると言っていたのだ」
「あ、あの……でもこれは……その……わ、わたしは専門外ですし、そ、そのぉ……」
「任せとくのだ。知らないなら、リオンがお手本を見せてあげるのだ」
その身体つきと同様、細くて幼いロリっ娘エルフの指が股間に伸びてくる。ぷにっと柔らかな指の腹が、陰毛が生え始めたばかりの男根に絡みついてきた。
「……っくぅ」
これだけで過去に経験のしたことがない快感が股間から迸り、ぞくりと背筋を震わせる。悪戯っぽい小顔が、そんなこちらの反応を見上げ、にんまりと笑みを浮かべた。そして、先端まですっぽりと皮を被った亀頭部分に、からかうようにふーっと息を吹きかけてくる。
包皮によって完全防備されているにもかかわらず「はふっ」と甘い吐息を漏らしてしまう。
「おー。サトルってばすっごい敏感なのだぁ」
リオンの言う通り、何しろ勃起状態の刺激に慣れていない。
そもそも、なんでおしっこをするための器官を刺激され、こんなに気持ちいいのだろうか。ひょっとして、これも邪神の呪いの一つなのかもしれない。こんな快感をペニスを弄

るだけで味わえるなら、他に何も手につかなくなってしまうではないか。
「た、たいちょぉ、セリカさぁん……。ぼ、僕、なんだかヘンだよぉ」
すがるような視線を自然と育ての母に向けてしまう――ドキッ！
斬り裂かれた胸元は自身を抱くようにして隠しているのだが、そのために弾力に溢れた母性の象徴が、柔らかそうに押し潰されている。
――うわわっ……な、なんだかセリカさんがいつもと違って見える……。
少年の視線を吸い寄せるのは、半露出した胸だけではない。元より剥き出しになっている両膝を地面に着けて姿勢を支えているのだが、その素肌のつるんとした艶やかさと、キチッと姿勢よく膝が揃えられている様子に、なぜか胸がドキドキしてしまう。
「わ、わたしは……その……サトルのためなら……あの、でも、こーいうことは……」
何より胸の鼓動を速めさせるのが、頬を真っ赤にして長い睫毛を伏せるように俯いている彼女の横顔だ。
いつも優しい微笑をたたえ教会で神の教えを説くセリカと、先ほどの戦闘で見せた冷徹なバトルシスターとしてのセリカ。そのどちらとも違う第三の顔がそこにある。
――こ、これって……。
恥じらう乙女の顔――年頃の女の子の表情だ。
そこまで認識して、やっと気付く。

半裸の胸、楚々と並んだ膝小僧、そしてこの恥じらう美貌。
サトルがドキドキしている正体は、セリカの女〝性〟に対してだ。それは自分が男だからだと唐突に理解する。思春期真っ只中の少年が、本当の意味で性を認識した瞬間だった。
「ぶー。さっきからサトルはセリカばっかりガン見してるのだ！」
こうなったら嫌でもコッチを見るようにしてやるのだ、と宣言したおちょぼ口がパカリと開かれ、小さくて健康的な桃色の舌が現れる――ぺろり。
「ひゃくうぅぅ！」
肉先の裏側辺りを、いきなり舐められ大きく仰け反ってしまう。
エルフの唾液とは、ひょっとして温泉のように熱いものなのだろうか。火傷しそうな灼熱感にサトルは涙目になっていた。
「た、たいちよぉ～。っくっ……そ、そんなところっ、き、汚いですよぉ」
何しろペニスはおしっこをするための肉器官である。
そこをいきなり舐めてきたことにビックリしてもいた。
「はぁん。なんだかこれはこれでグッときちゃうわねぇ」
サトルの反応を真後ろから見ている戦乙女が、はぁと甘い吐息を漏らす。その熱さがゾクゾクしっぱなしのうなじに吹きかかり、さらに官能の震えが加速する。
「ほらほら。セリカも一緒にするのだ。これもサトルのためなのだ」

「……っ……」
初恋相手にチラリと上目遣いで見上げられる。恥じらいに頬を染め、慌てたようにその美貌を再び俯ける彼女が、なんだかとっても可愛く見えた。
「ああっ……主よ……これは私に与えられた試練なのでしょうか……。それとも……」
金髪のシスターはソッと長い睫毛を伏せると、引き裂かれた胸を隠す左手とは別に、右手を胸元に寄せてロザリオを握り締めた。白い手の甲に浮く筋の深さで、彼女の悩ましい心情を察することができる。
「なんだか見てるこっちがドキドキしてきちゃうわね」「なのだぁ」
数秒の葛藤の後、シスターは桜色の唇を開き、神の教えを説くための舌を露わにする。
ごっくん――サトルは大きく生唾を飲み込んでいた。
リオンに舐められペニスに走った快感が、今もはっきりと身体に焼きついている。
その記憶とリンクして、今まで意識していなかった女性の口許がたまらなくエロティックに見えた。あの桃色の柔らかそうな肉片が動くだけで股間がさらに猛ってしまう。
ぺろっ、ぺろぺろっ。
「あくぁ、セ、セリカさんまで……っ、そんなっ、ふっあぁぁあぁぁ」
敏感な肉先を上司に続いて育ての母にも舐められ、甘い吐息が溢れ出る。真上を向いていた男根がさらにビクンと剛直して、自らのヘソを一度叩いた。唐突な牡肉の動きに敬虔

なシスターはびっくりしたようだ。その凛々しい瞳を寄り目にしている。
　対して隣のチビっ娘エルフは、悪戯っぽい笑みを浮かべていた。
「ペロペロすればすぐにイッちゃうと思ったのに、サトルってば意外と頑張るのだ。やっぱりお子ちゃまチンチンだと、簡単にどっぴゅんしないみたいなのだ」
「あ、あの……その……どっぴゅんって……その、なんのこと？」
　サトルは思い切って質問してみた。
　リオンだけではなく、隣のセリカもポカンとしている。
「き、君……射精って知らないの？」
　ディアドラの問にも、恐る恐る顔を横に振るだけだ。こんな事態になる前に、リオンと彼女がかけあいのように喋っていた会話の中でその単語を聞いた気もするが、意味はまったくの不明である。
「オチンチンから赤ちゃんの種を出すことなのだ」
　リオンの説明を聞いても、ますます首を傾げることになる。
「えっ？　な、なんなのそれ？　赤ちゃんって……愛しあった男女が夫婦になって仲良くしてると……そ、その……その愛をお認めになった天使様がコウノトリを遣わされて、授けてくれるものなんじゃないの？」
　サトルのマジゼリフに、リオンとディアドラの唖然とした顔がセリカに向けられる。

「……あ、あの……それは……」
彼女にしては本当に珍しく、悪戯を見つかった子供のような上目遣いで「だってぇ」と弱々しく呟いた。
「えっ⁉　い、今の話って……う、嘘だったの？」
本当にびっくりした。セリカが自分に偽りを教えたことが信じられない。しかも、彼女の顔を見る限り、真実を知っていたにもかかわらずあえて違ったことを教えたという表情だ。
この赤ちゃん話は、サトルがまだ幼い頃、旅の最中に尋ねて教えてもらった記憶がある。敬虔なシスターを絵に描いたようなセリカが、幼子に対してあえて事実ではないことを語ったとでもいうのだろうか。
「まあ、ネンネのセリカじゃ仕方がないわよねぇ」
「今からリオンが、衝撃の真実を教えてあげるのだぁ！」
エルフの舌が再び男根に絡みついてくる。そしてシスターの舌も、まるでバレた嘘の埋めあわせでもするように、勢いよく絡みついてきた。恥じらいを見せながらも一生懸命な舌使いに、サトルの肩に顎を乗せるようにしているディアドラが口許を斜めにする。
「あらあら、セリカもなかなかやるわねぇ」
唾液にぬめる熱い味覚器官の感触が、じぃんとペニスに染み渡る。

『第三章　戦乙女とはじめてクエスト』より

「あらあら。坊やも先走りでヌレヌレになってるじゃない」
ディアドラのセリフから考えて、どうやらそれはおしっこではないらしい。僅かに粘度が高そうだし、黄色くもない。そんな牡牝の分泌液をたっぷりと滴らせている性器同士が、ちゅぷり、と接触する。
「あっぅ――」と、肉先で感じた灼熱感に全身が強張る。
――えっ⁉　どうするの？　いったい今から何する気なの？
未知の経験の連続で、頭の中は？マークでいっぱいだ。しかしその全てが性的興奮のピンク色に染まっている。
「ああっ、凄い……入り口のカンジだけでも、今までで一番の大剣よぉ」
わたし大きな剣が大好きなのぉ、とディアドラも軽く顎を浮かせ、興奮に上擦る声を漏らしながら腰を落とし始める――ずぷぅぬジュルるるっ。
たっぷりの蜜液で熱く泥濘(ぬかる)む牝肉に、半剥けペニスが深く埋もれていく。
まさか身体の中に男性器を入れるとは思わなかった。まずはその驚きで両目を剥き、直後、亀頭を襲う熱い肉悦に鋭く喘いだ。
「あっ、あつぃ！　す、凄くっ……あつっ……」
先日ダブルフェラを受けたとはいえ、ペニスへの刺激には慣れていない。そもそも勃起していない時は、今でも先端は包皮の中にすっぽりと納まっている。露出自体が稀なこと

で、これほど剥けた状態も実質二回目なのだ。
それだけ過保護になっており、肉の感度は抜群だった。
「っくふぅぅぅ……。すっごいオチンチンのビクつき方ねぇ。こんなの初めてよぉ」
ゆっくりと腰を落とし続ける戦乙女も、うっとりと瞳を細め、見事に浮き上がる腹筋をビクつかせている。しかし今のサトルには、相手の反応を観察するような余裕はない。
「あっ、あっ、燃えるっ。おちんちんが火傷するっ……くぁぁぁぁぁぁ！」
彼女の股間で茂る赤毛が、まるでその奥にある肉壺を熱く煮立たせる炎に見えた。
この全身の神経が灼けつくような、凄まじい快感はなんなんだろう。
リオンに肉先を咥えられた時も、その熱い密閉感に背筋が痺れたが、この交わりはそれを遥かに超えている。何しろディアドラの中に入っていく肉棒の全面が、しっかりと膣襞に包まれているのだ。無数の舌に包まれていくような感覚に、喘ぎ声が止まらない。
「んっはぁぁぁぁ……ほんとにスゴっ……喉まで届きそうな感じでっ――くふぁんっ！」
ディアドラが完全に腰を落とし、紅蓮の茂みがチョロッと生えたこちらの黒い陰毛に接触した。直後、肉先が彼女の最深部にコツンと当たる。
「あはぁんっ。今、君の先っちょが当たってるところが女の大事なところよぉ。ここに男の子がどっぴゅんすると、二人の可愛い赤ちゃんができるの」
愉悦の底なし沼に初めてどっぷりと浸かった少年は、頬を小刻みにプルプルと震わせな

がら、ワイルドな美貌を見上げていた。対して赤毛の女戦士は左手を床について身体を支え、捕らえた獲物を落ち着かせるように、右手でその震える頬を撫でてくる。
「うふふっ。つまり今君がツンツンしてるところがコウノトリさんの巣なのよぉ」
そう説明されても、その概念を理解するだけの冷静な理性は残っていない。
――す、凄いこれ。ヌルヌルしてて、ウネウネしてて……奥の方から吸いつく感じで…。
初セックスの快感に、頭の中はドロドロに溶けていた。半開きになった口許からはだらしなく涎を垂れ流し、今自分が感じている肉悦をただただ享受するばかり。
「あはっ。なんだかここって熱いわねぇ」
赤い顔をしたディアドラが、とうとう胸を覆っていた黒の肌着を左右に開く。その下から現れた、白い牝肉の塊に少年の視線は釘付けだ。
収縮性の高い黒布のサポートがなくなっても、その美しい半球状の曲線に乱れはない。
それどころか生地の締めつけから解放されて、乳房本来の柔らかさに従い官能的にゆさりと揺れている。何よりもサトルの目を引きつけるのは、鮮やかな鴇色の頂点だ。周りの乳肌が雪のように白い分、その彩りがさらに引き立って見える。
――こ、これが、おっぱい……。わわっ、ディアドラさんの……おっぱいが……。
両手を肘から折り曲げて、少し上に伸ばせば掌に収まる位置で息づいている。その扇情的な揺れ具合といい、まるで下から掴んでくださいとアピールしているようだった。初セ

ックスの快感で、普段の理性が吹き飛んでいる少年の手は、無意識にそれへと伸びていく。
「ああん。さっきまでマグロだったクセに、エッチが始まったら意外と積極的なのねぇ。うふふっ。そういう子、嫌いじゃないわよ」
生のバストをワシ掴むと、その持ち主も甘い吐息を漏らした。肌着越しとの一番の違いは、やはり指に吸いついてくるようなキメ細かな肌触りだ。乳肉の柔らかさがさらに増す。
そして何より驚いたのは熱い蜜壺の反応だった。
今まで心地よく男根を包んでいた膣襞たちが、きゅっと突然引き締まったのだ。ペニスにもたらされたその愉悦の絞り込みと同時に、サトルはハッとする。
――デ、ディアドラさんも……気持ちいいんだ……。
唐突に理解した。
妖艶な美貌の赤らみ。切れ長な瞳の潤み。そして掌に当たってる乳首の硬さ。自分が感じているように、相手も感じているということが、今になってやっとわかった。
「どうしたの？　いきなり、おっぱいニギニギしながらポカンってしちゃって。うふふっ。気持ちよすぎて言葉も出ないってところかしら」
これからが本番なのよ、と続けられても少年には何が何やらわからない――ヌくちゅ。
「はくううぅ！」
ディアドラの腰がゆっくりと動き、サトルは大きく仰け反った。それは左右の尻を別々

に上下させるような、骨盤の両端を交互に揺するような腰振りである。
「あっ、あああっ……これ……ふぁああぁ、中でっ、こ擦れてっ……くふぁあぁぁっ！」
蜜壺がペニスを軸に小刻みに左右に揺れる。しっかりと鍛えられた彼女のインナーマッスルのおかげなのか、まるで蜜壺自体が煽動し、埋まったペニスが揉み込まれているような感覚だ。根元まで飲み込んだ肉棒を、自分の女性器に馴染ませるような動きである。
――アソコが奥までウネウネしながらオチンチンに、っ……か、絡みついてくるっ！
男根の筋や溝を埋めるように、蜜壺の内側にびっしりと並んだ襞々たちが、ぐじゅぐじゅとまとわりついてくる。キツすぎずユルすぎない濃密な結合に、喘ぎ声が止まらない。
「あはあンっ。そろそろ大きく……っんっ……動くわよ――ンンっ！」
顔の半分を隠す赤毛のロングヘアをセクシーに掻き上げながら、肉感的なヴァルキリーの腰が横方向ではなく、真上に向かって昇り始めた。
「くふぁぁっ！　お、おちんちんがっ、す、吸われるみたいでっ、はぐううっ！」
今までの小刻みに揺するような動きではなく、ペニスの全面を膣襞たちが大きく擦っていく快感に顎が仰け反る。愉悦に力み、掴んでいる乳房をさらに強く握り締めてしまう。
熱い愛液にまみれた蜜壺との交わりは、無数の舌に同時に舐め上げられたような快感を少年にもたらした。ディアドラも強い快感を受けているようで、恍惚とした表情をしながら、性器同士の摩擦に合わせて「ああっ、ああっ」と喘ぎ声を上げている。

股間から湧き上がってくる壮絶な快感と、憧れの人が漏らす官能の声が少年の意識を混濁させた。

ぬぷヌるるルっ――ディアドラが今度は腰を勢いよく落としてくる。

「っくっ⁉　い、今、さ、先っちょがっピチッって……っはぐあぁあぁぁ！」

サトルの喘ぎ声が、先ほどよりも遥かに高く鋭いものとなる。

それは剥き身になった亀頭が、牝肉を掻き分けていく快感だけのものではない。まだ三分の一ほど先端を――亀頭の肉傘部分をカバーしている包皮が、その盛り上がりに食い込んでくるためだ。今まで露出していなかった最後の部分が、今の一振りで僅かにズリ剥けて、灼熱感を伴う快感エリアがさらに広がっていた。

「どう？　セックス気持ちいい？　それとも子供オチンチンが突っ張って痛いかな？」

ディアドラの弾力溢れるヴァギナによって、残りの包皮が削られるように剥かれていく。

「き、気持ち……いいですっ。凄く……気持ちいいです」

「やっぱり仮性包茎だったってことね。本当ならとっくに剥けてたってことよ。もう、セリカったら。そーいうこともちゃんと教えなきゃいけないのに母親役失格ねえっ。まあ、いまだにコウノトリって言ってるんだから、それもしょうがないかな」

ディアドラはサトルと身体を繋げたまま、悪戯っぽくパチリと片目を閉じた。

「このまま初体験をしながら身体も大人にしてあげる。それまではイッちゃだめよ」

イク、とは先日初めて経験した射精のことだろう。確かにどこに『行く』わけでもないが『イク』という表現がピッタリの感覚だった。

「オマ〇コの中で皮を剥いてもらえる経験なんて、滅多にできないんだから――ンんッ」

ディアドラが鋭い声を発すると、下半身に力を入れたようで、お尻がキュンと吊り上がった。臀部の横にポコッと尻エクボが発生し、ペニスを包む膣襞がキュッと引き締まる。

――うわああっ。す、凄いっ……。本当にアソコにオチンチンが握られてるみたい……。

改めて見上げる戦乙女のプロポーションは、胸から腰への鋭いクビレに代表されるように、凹凸のハッキリしたセクシーな身体つきをしている。腹筋や太腿など女性としては平均以上に筋肉質な部分もあるが、決して筋張ってはいない。つまり、とても巨大ゴーレムを一刀両断できるような見た目ではないのだ。

「ほらほらぁ。こぉ～んなところでキュキュってされる感じはどうかしらぁん」

その正体がこれである。インナーマッスルが異常に発達し、しかも自在に動かせるらしい。隠れ肥満ではなく、隠れマッチョというべきか。そんな鍛えの入ったヴァギナに包まれ、揉み込まれ、初体験の少年が長く持ちこたえられるはずもない。

「ああっ、あっ、す、すごっ……すごおっ。そんなに中でグリグリしないでぇっ！」

女戦士が腰で〝∞〟を描くように動き始めた。膣の奥から入り口方面に向かって、蜜壺が淫らに煽動する。まるで女性器を外側から掴み、縦方向に扱いているようなうねりが発

生していた。当然、包皮の食い込み具合は増すが、奥から湧き出る大量の蜜が潤滑液となり、痛むほどの突っ張りは感じない。

「わ、私の中でっ、っっ……先っちょがメリメリしてきてるわねぇっ――んはあぁぁ！」

それどころか彼女が腰を振るたびに、ほんの僅かなエリアがさらに剥かれ、亀頭の感度が跳ね上がっていく。新たに増加する灼けつくような快感に何度も仰け反り、無意識に後頭部を床にガンガンと叩きつけていた。

気付けば全身から汗が噴き出し、ディアドラの乳房を掴む指先にも力が籠っている。

「坊やのおチンポ、んんんっ！　反り返りのゴリゴリ加減がサイコーよぉっ！」

対してディアドラの喘ぎ声もあからさまに上擦っていた。

刺激すれば気持ちいい生殖器官が、男と女で凹凸に生まれ、こうして一つにした果てに赤ちゃんができる。凄い仕組みだと思った。コウノトリよりずっと凄い。

それでいて、二人を見下ろす聖母像の視線に、ほのかな罪の意識を感じてしまうのはなぜだろう。後ろめたさを感じるほど、気持ちいいからだろうか。それともシスターセリカを連想するためだろうか……。

「はあぁん。もう、どこ見てるのよぉ。そんな悪い子はこうしちゃうから」

横方向に∞字を描いていた腰つきに、縦方向の捻りまで加わった。ペニス全面で渦巻く愉悦の嵐が凄まじい。サトルの腹上で踊る紅蓮の茂みはまさにレッドトルネード。グチュ

グチュと湿った音を響かせる二人の結合部分から、白く泡立つ二人のラブジュースを豪雨のように滴らせる。
「ああんっ、これ凄いっ。こんなに熱くて硬いのっ……は、初めてよぉっ……はあぁあぁんっ！　お、奥のおくにぃ、ゴンゴンって、ああぁああぁ当たってるうぅっ！」
少年剣士を責めるための立体的な腰の動きが、子供離れした〝豪剣〟によって、逆に歴戦のヴァルキリーを追い詰める。剣ではとても敵わない、大陸最強の女戦士を深く貫いてる現実に、サトルの意識は今にも吹き飛びそうだった。
ぐちゅぐちゅヌちゅちゅっ！　ずチュぐちゅヂュちゅヂュン！
ダイナミックだった戦乙女の動きが、結合当初のような小刻みなものへと変化していく。しかしそのスピードは、セックス始めの性器同士を馴染ませるような、じっくりしたものではない。自身の感じるスィートポイントに、夢中で男根の肉傘を擦りつけているような性急さだった。巧みにコントロールしていた淫らなインナーマッスルも愉悦に暴走し、強くペニスを握りっぱなしだ。温泉のように湧き出る愛液で充分にふやかされた包皮が、その激しい動きに押されてさらにズリ剥けていく。
「デ、ディアドラさんのっ、ア、アソコがっ……ふあぁ、ささ先っちょにっ絡んでっ、し、絞り込んできてっ。お、おちんちんのッッ先っちょがあぁあぁっ！」
今では径の一番太い、カリ部分に引っかかるように残っているだけだ。

腰の奥には、前回初射精をした時以上の官能の昂りが発生していた。果てないように、手にしたウエストを握り込むのだが、それがさらに女戦士の動きを加速させる。ディアドラはその手を振り払うように、見事な形に盛り上がった腹筋を突き出し、蜜壺奥の天井部分――縦に走るヘソの裏側辺りに強くペニスを擦りつけていた。

「さ、先にイカされちゃううっ！　子供チンコにオマ〇コっズリズリされてぇッ、あああぁ！　初めての坊や相手にイカされちゃうううううっ！」

赤毛のロングヘアを勢いよく掻き上げながら、顎を真上に仰け反らせて絶叫する。

牝獣のようなしなやかな四肢は官能に震え、豊かな乳房は大きく弾み、愉悦の汗を飛び散らす。深く咥え込んだ肉棒の先で雷撃魔法でも炸裂されたように、その表側で淫らにうねっていた縦割れのヘソが、不自然なまでに激しくブルブルと痙攣した。

ぷしゃあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁッッ！

紅蓮に彩られた陰毛の下から、勢いよく熱い体液を噴出させる。ペニスを包む蜜壺が、今までとは比較にならない強さで引き絞られた。

――えっ⁉　なにっ⁉　お、おしっこ⁉

潮の直撃を下腹に受けた少年も、その熱さと勢いにびぐんと腰が跳ねた。一流のヴァルキリーでなければありえない牝肉の強烈な締めつけの中で、当然男根が上へと動く。

ぐじゅルンっ！

深さのある膣襞の一枚一枚が、ペニスの全面に強く吸いついていた。まるでそれが滑り止めのように、肉棒と膣が完全に一体化している。
そんな中での突発的な突き上げだ。ペニスの外側に膣襞たちが食い込んだ状態で上に動いたため、包皮の位置はそのままで、中の亀頭部分だけに突き上げの力が集中し――。
ぴちっ！
肉傘に引っかかるように残っていた最後の包皮が一気に捲れた。
今まで密閉されていた亀頭の中でも最も感じるカリ裏部分が、絶頂の真っ只中でグツグツに煮立ったディアドラの膣中で露出する。
火傷しそうな猛烈な灼熱感は、全て初セックスの快感一色に変換された。
ずっと前から爆発寸前だった少年ペニスが、この愉悦に耐えられるわけもない。
「熱っ、うぁああっ！　い、いくっ！　いっちゃうっ！　ああっ、ディアドラさんの中で、いっちゃうよぉおおおぉぉ！」
包皮が完全に剥けてつるりとした肉先を夢中で突き出し、ずっぷりとディアドラの子宮孔にメリ込ませた。
「はああんっ！　いいわよ出してええぇっ！　ぶちまけてぇえええっ！　坊やのむきたてオチンポをぉぉっ！　わたしのなかでぇドクドクさせてえええぇえぇぇっ！」
初めて包皮が完全に剥けた衝撃的な快感に包まれたまま、サトルは全身を息ませた。最

強の戦乙女を腰に乗せたまま背が反り返り、相手を持ち上げた状態で男根が脈動する。
ドリゅン！　ドリュどぷどぎゅどぷンッ！　ドリュどりきゅどぷンっ！
女の膣にしっかりと包まれながら、茹だりきった精液を吐き出す肉悦は、先日経験した舌奉仕による射精よりもさらに深い快感をもたらした。これが射精行為の本質なのだと、凄まじい性の開放感の中で実感する。
「あはああんっ！　でてるうぅぅぅ！　坊やのドクドクがわたしの中で爆発してるうっ！とっても熱いザーメンがぁ、私の奥にズビズビ突き刺さってくるうぅぅぅっッ！」
お互いの体液を身体の外と内に撒き散らしながら、二人はセックスの絶頂を極めあう。
サトルは長く脈動を続け、ただただ憧れの女戦士に中出しする現実に耽溺していた。
「ああっ……ふああっ……。すごく、いっぱい……イッちゃったぁ……」
痙攣しながらの、全身の強張りを先に解いたのはディアドラの方だった。
仰け反らせていた顎をカクンと前に落とし、こちらの胸に上半身を倒れ込ませてくる。
汗にまみれた豊かな乳房が、少年の引き締まった身体との間で押し潰される。
「かっ……くふぁ……で、でぃあどらさあぁん……」
心地よい女体の重みに、閉じていた瞳を開けた。
絶頂の余韻で甘く緩んだワイルドな美貌が、官能の涙で滲んだ視界に映る。
「とっても……とっても気持ちよかったです」

「私もよぉ。坊やに女慣れさせてあげるつもりが、ついつい夢中になっちゃった」
至近距離でうっとりと見つめあいながら囁くたびに、唇が微かに擦れあう。そのたびにお互いの唇を啄(ついば)みあい、甘く舌を絡めあった。
そうしてセックス直後の気だるい余韻を、まったりと二人で味わっていた時である。
甘い雰囲気をぶち壊すように、バタバタとした駆け足が教会に向かって近づいてきた。元気いっぱいなその足音は、ノックすることなくいきなりバァァァンと礼拝堂の扉を蹴り開く。
「サトルゥゥっ！　やっと悪い子オーラの分析がおわったのだぁ！　……ふぇ？」
鼻高々な表情で入ってきたロリっ娘エルフは、聖母像の真ん前で半裸状態で重なりあっている二人を見て両目を点にする。
しかしそれも一瞬で、緑色のショートツインテールを逆立てながらリオンが絶叫した。
「ふたりして、何をしてるのだぁぁぁぁぁ！」

『第六章　ハーレムパーティでクラスチェンジ』より

全身を激しくビクつかせ長時間責められ続けていた欲情を、愉悦の肉汁に変換して吐き出し続ける。肉先から飛び出たザーメンは、桶の底につく前にその鋭さを緩め、ポーションの中に溶けていく。それでも残る白いダマ状の塊は、ゆらゆらと水面に漂った。

サトルが完全に射精を終えるまで、三人はアナルを舐め続けてくれた。

「あっ、っふぁ……んふぁぁぁぁ……」

ビクビクと男根が脈動しても、先端から新たな肉汁が出なくなり、三人はやっと少年の尻から顔を離した。サトルは力みが抜けて、がくりと桶の上に下半身を落とす。

「サ、サトル！　だ、大丈夫？」

セリカが慌てたように上半身を支え、起き上がらせてくれた。

「……はあっはあっはあっ……う、うん。あ、ありがとう」

心配そうにこちらの顔を覗き込んでくるシスターに、サトルは力なく微笑んで応えた。

セリカはそんなサトルを見ていつも通りの気性の優しさを確認したのか、ほっと胸を撫で下ろしている。

「よかったです。一瞬、途轍もない力をサトルから感じた気がしたんですけど、邪神の力が残っていたわけではないみたいですね」

「う、うん。ほら、なんともないよ」

サトルは改めてセリカに向かい笑顔を見せた。

「うーん。坊やがイッちゃう時の雰囲気は、ちょっと普通じゃなかったわよねぇ」
「リオンの魔法を破ったんだから、ただごとじゃないのだ。髪もツンツンしてたのだ」
「でも、邪悪なオーラはまったく感じませんでしたよ」
懐疑的な意見を述べるディアドラとリオンに対し、セリカはギュッとサトルの頭を胸に抱き締めて反論してくれる。その姿はやはり、恋人を庇うというよりも、溺愛する子供を守る母親に近かった。
「そもそも……今のチェックだけで、本当に邪神が消えたと確実に言えるのかしら」
今更な女戦士のセリフに、セリカとサトルが異口同音に「えっ？」と声を漏らす。
「前回は確かに今ので暴走したけど……じゃあこれで暴走しなかったからといって、邪神が完全に祓われてるとは断言できないじゃない」
「ちょっ、ちょっと待ってください！　それじゃあキリがありません！」
シスターの反論に、サトルも彼女の胸の谷間でコクコクと顔を上下させる。
「ポイントは、サトルを限界まで追い詰めることなのだ！」
いつもは子供染みた――というか幼児染みた言動ばかりをしているリオンが、唐突にびしっと指摘する。他の三人はハッとした。確かに彼女の言う通りかもしれない。
前回、邪神が暴走したのは、射精禁止の魔法をかけられたためではなく、サトルが命の危機を感じるほど限界まで追い詰められたからなのだ。

見た目はロリっ娘エルフだが、実はこのメンバー中最年長なだけのことはある。
「で、でも……これ以上どうやって……」
サトルがポツンと呟くと、リオンがニコッと満面の笑みを浮かべた。
「ここまで来たら、もうヤルことは一つだけなのだぁ！」

※

「あ、ふはあっ……も、もう……げ、限か…いっんぐうっ」
ギブアップを宣言しようとした直前、その口許をリオンに塞がれる。小さな唇に上手く角度をつけて、口に含んだポーションを強引に流し込んできた。喉の奥に燃えるような熱を感じた直後、眉間にびびっと稲妻が走り朦朧としていた言識が一気に冴える。
現在、サトルはリオンが魔法で出現させた、適度な弾力のある薄いベッドのような物体の上で横になっていた。まるで雲にでも乗っているように心地よいアイテムだ。
そして身体の左右を半裸状態のディアドラとセリカに挟まれている。
戦乙女は手足に籠手と脛当てを着けただけ、セリカも足に編み上げのブーツと首に金のロザリオを垂らしているのみ。つまり二人とも胸から股間にかけての胴体部分には何も身に着けていない。上に乗っているリオンも同様だ。森の妖精をイメージしたアームカバーやロングブーツはそのままで、ヒラヒラの付いた緑のコスチュームだけは脱いでいる。
そして彼女たちはその剥き出しの胸や腹部、股間を使い――。

「ほらほら、身体の方も、もう一本いっときましょぉ」
ディアドラがピンとポーションの蓋を開けると、中の液体をこちらの胸にとろーっとふりかけてきた。適度な粘度があるために、水と違って身体の上に留まるのだが、それが流れ落ちる前に――ぬるるるるっ、ぷりん、ぬるるるるるるっ。
豊かな乳房を巧みに使って塗り伸ばしてくる。
――ディアドラさんのおっぱいが、すっごくプルンプルンして、気持ちいい～。
重量感満点のバストが、ヌルつく液体まみれになって擦りつけられる。自分の身体の凹凸に合わせて、戦乙女の巨乳がなめらかに形を変えていく光景がたまらない。
「サ、サトル。……あの、……こ、こんな感じでいいですか？」
ヌルっこ、ぬっこ、ぬちゃぬるるるっ。
対して左半身は、セリカのプリッっと弾力に富んだ乳房が塗り伸ばしてくれる。その動きはぎこちないが、一生懸命に身体を擦りつけてくる健気さに鼻の下がデロンと伸びてしまう。
――て、天国だぁ～～。
ディアドラとセリカの二人に、上半身をポーション洗いされる快感に喘ぎ声が止まらない。まるで自分自身が一本の肉棒となり、その全面を二人に挟み扱かれているようだ。そしてサトル本来の肉棒は、真上を向きっぱなしである。今では完全に包皮は剥けた状態で、

女体の感触を強く感じるたびに、ヒクンヒクンと肉先を揺らしている。
すでに数えきれないほど射精をしていた。
サトルの身体に邪神が残っていないか確認するため、という名目でディアドラとリオンのスーパーテクニックによって精を絞り尽くされている。対してウブなセリカは二人の行為に圧倒されながらも、見よう見真似で、一生懸命奉仕してくれていた。
「今度はここでイカせちゃうのだぁ」
ポーションの口移しを終えたエルフが、今度は下半身に向かって移動する。
サトルは愉悦の涙で滲みっぱなしの瞳を下に向けた。
まず視界に飛び込んできたのは、自分の両乳首に舌を絡みつけているディアドラとセリカの美貌だ。戦乙女はその長い舌で包み込むように小さな突起をなぞりながらこちらの様子を窺っていた。サトルと視線が合うと、嬉しそうにその瞳を細める。対してセリカはうっとりと瞼を閉じ、ペロペロと一心に乳首を舐め続けてくれていた。
「男の子のくせに、っれろんちゅんっ……こんなところをピンピンにさせちゃって、ほんとにエッチな子なんだからぁ――んじゅるんはぁぁ」
「サトルぅ、んんんっ、もう少しの辛抱だから、チュチュんんっ、ガンバってね」
妖艶と清楚――対象的な二人の美女に同時奉仕を受けているだけで、鼻血を噴き出しそうな興奮を覚える。巧みな舌使いも、一生懸命な舐め奉仕も、どちらも男心に直撃だ。両

乳首からビンビンと弾ける具体的な快感と混じりあい、さらに愉悦を深めさせる。この間も、両脇腹をそれぞれの巨乳でポーション洗いをし続けてくれるのだからたまらない。

「ふあぁ……ふ、二人とも、すごく、き、きもちいいっ――はくううっ！」

意識が乳首舐めをしてくれる二人に向いたその時、ペニスが心地よい圧迫に包まれた。

慌てて視点を手前から遠くに切り替える。

リオンだ。ロリっ娘エルフがこちらの腰の上に乗っていた。

自分と視線が合うと「にししっ」と悪戯っぽい笑みを浮かべて腰を揺らす。

最初はまた性器で結合したのかと思ったが違うようだ。牝肉に牡肉が食い込むような、小柄なリオンならではのきつい結合感がない。こちらに向けられている幼い美貌も、セックスに合わせてフニャと緩むところが、いつもの天真爛漫な表情をしたままである。

「サトルのオチンコで火傷しちゃいそうなのだぁ」

こちらに突き出すようにしているロングブーツの膝がモジつくと、ペニスが揉み込まれるように扱かれる。どうやら太腿の間に男根を挟んでいるようだ。首を上げるようにして彼女の股間を見てみると、自分の真っ赤に充血した亀頭が太腿の間から覗いていた。

「湖に住むナゾのカイジュー、出現なのだぁ」

リオンが己の股間にポーションを流し始めた。ぴちっと閉じた太腿と股間の間に、三角形の池が出現する。どうやらその中に沈んだ肉先を、怪物に見立てているらしい。言動は

完全に子供の水遊びなのだが、やたらと性行為に手慣れているから始末に負えない。
「ひ、ひとの大事なところで、な、なにをしてるんですか――っふぁ、っ、っっくふぁ」
射精のしすぎで感覚が薄れ始めていた男性器の感度が、ポーションに直接浸されたことにより一気にクリアになっていく。肉棒の裏に密着している陰毛の茂み具合や、肉幹を包むしなやかな太腿の感触がハッキリと認識できる。
「今からカイジュー退治をするから、サトルはジッとしてるのだぁ。むふふっ。リオンのスペシャル素股を、サトルのオチンコザウルスにお見舞いしてあげるのだぁ」
どうやらこの太腿に挟まれる行為のことを『すまた』と言うらしい。身体をビクつかせる少年に、リオンが隊長口調で我儘っぽく命令してくる。
「ジッとしてろなんて、……そ、そんなの、無理だよぉ」
何しろ彼女の素股だけではなく、ディアドラとセリカにヌルヌルと絡みつかれながら全身をポーション舐め洗いされているのだ。しかし相手は、こちらの事情など聞く耳持たずエロ行為を続行してくる。
ぴちっと閉じた太腿の三角池の中に右手を突っ込み――ヌるるルるン。
「ひひゃぁ!?」
サトルは裏返った声を上げて、彼女が乗っている腰をビクンと跳ね上げてしまった。ロリっ娘エルフが股間から顔を出している亀頭部分をポーション池の中でワシ掴み、手首を

捻るようにして扱いてくる。
「ああん。坊やってばおヘソまでビクビクさせちゃってぇ。ホントに敏感なんだからぁ」
そんなことを言われても、三角池にちゃぷちゃぷと粘っこい波を立たせながら亀頭を扱かれて、愉悦の声が止まらない。しなやかな太腿に挟まれているだけでも、充分すぎるほどの快感だったのに、ヌルつく指奉仕まで加わっているのだ。
リオンの掌は実年齢とは関係なく、ぷにぷにした感触でとても幼い。その柔らかな手を使い、まるで泥遊びでもするような無邪気さで肉棒を弄り回してくる。ポーションの適度なぬめりと相まって、背筋が震えるほどの愉悦が迸り続ける。サトルは無意識に腰が跳ねてしまうのだが、リオンは巧みにバランスを取って腰から落ちることはなかった。
「オチンコザウルスが大暴れなのだぁ。むむむむっ。ならばこれでどうなのだぁ」
彼女の言動が怪獣ゴッコに夢中になっている子供そのものなのだからたまらない。なぜか、とってもイケナイことをしている気分になってくる。ペニスを襲う手慣れた女のテクニックと、耳から雪崩れ込んでくる牧歌的なゴッコ遊びとのギャップに、純情な少年は精神までも追い詰められていく。
「……サトル。さっきから困った表情をしてるのに……凄く気持ちよさそうですね」
ヌルヌルの身体を必死に擦りつけながら、育ての母にそんな指摘をされても困ってしまう。対して職場の上司は、ギュッと己の太腿を閉じあわせ、液体を漏らさないようにしな

がら、指をさらに奥へと突っ込んできた。掌を上下させながら手首を巧みに捻ってくるため、ペニスが愉悦の螺旋に巻き込まれる。

じゅぽぬる、ヌチゅるる、シュコしゅる、ぬちゅルルくちゅるるるルっ。

肉幹を締めつける細い太腿のしなやかさ。裏筋に密着している豊かな茂みと、牝華の複雑な弾力。肉棒全面に絡みつき、巧みな強弱をつけて扱いていく指と掌。ちゃぷつくポーション池の中は、この世に二つとない名器と化していた。

「す、すごっ、隊長のっ……あふぁっ！　ゆ、ゆび、もも、あ、アソコがあっつふぁあ！」

ふわふわした特殊ベッドの上で、サトルは激しく身悶える。

「ああん。坊やったら、ほんとに可愛いんだからぁ」

「あふっあ、デ、ディアドラさ――んぐっ」

喘ぐ少年の姿に凛々しい瞳を糸のように細め、紅蓮のヴァルキリーが唇を塞いでくる。こちらの胸にヌルつく乳房をねっちりと擦りつけながら、顔に角度をつけて奥まで舌を突っ込んできた。愉悦に震える少年の舌を優しく捉え、巻き込むようにねぶり上げてくる。

「……サトルったら……さっきからリオンさんやディアドラとばっかり……」

少年が元同僚と濃密ディープキスをしている姿を、先ほどと同じようにセリカが真横でジッと見ている。彼女にしては珍しく、滅多なことで寄らない眉間に、僅かながら不機嫌そうな縦皺を走らせていた。こちらの脇腹にその見事なプロポーションをヌルヌルと擦り

つけながら、切なそうにクスンと鼻を啜り、頬をペロペロと舐めてくる。
まるで大好きなご主人さまに構ってもらいたい子犬のような仕草だった。
これはあくまで邪神が完全に払えたかのチェック行為だ、と頭ではそう考えていても感情がついていかないのだろう。自分以外の女性と濃密に絡みあう少年の姿に耐えかねて、複雑な色を瞳に浮かべている。……だがしかし。
――うわぁ～。今のセリカさんっ。なんだかムチャクチャ可愛すぎるぅ～。
敬虔なシスターが抱いている繊細な乙女心など、色恋に疎い少年は知る由もない。あのいつも凛々しい育ての母が見せている、なんだか庇護欲をそそられる行動に、サトルは純粋に興奮していた。
ペニスをリオンのスクリュー素股に責められ、ディアドラと舌と舌が溶けあうようなディープキスをしながらも、空いた片手で強くセリカを抱き寄せる。彼女のなめらかな肩をギュッと掴み、心地よいシスターの女体としっかり身体を重ねあう。
「も、もうサトルったら……。いつからそんなお調子者になったんですか」
セリフに少し棘はあるが、シスターの口調は甘かった。瞳を潤ませ頬を赤く染め、さらに熱心にサトルの頬をペロペロと舐めてくる。
「んんちゅうんっ……坊やってば、案外、大物かもしれないわねぇ――れろれるちゅう」
執拗にディープキスを続ける戦乙女は、さらにその長い舌を伸ばし今度は口腔内を責め

始める。歯茎や口蓋にいたるまでヌルヌルとなめらかに這い回り、とうとう頬の裏側までその舌先を伸ばしてきた。

セリカが一心にペロペロと舐めてくれている頬が、内側からポコッと盛り上がり淫らにうねり始める。ウブなシスターは少年に密着させている身体を驚きで一瞬、ビクッとさせたが、それでも舐め奉仕をやめなかった。

「ふひゃぁ……ふっくひゃぁ……」

ディアドラによって内側からくにゃくにゃと盛り上がりを移動させている頬を、セリカが外側から舐め続ける。時にはそのうねりに舌の動きを合わせ、時には唇を窄めて小さな突起を強く吸う。言ってみればサトルの頬を挟んだセリカとディアドラのディープキスである。自身の口腔内から染み渡る、具体的な肉悦だけに留まらず、淫靡な行為そのものに脳味噌が沸騰しそうなほど興奮してしまう。そして――

「これでオチンコザウルスにトドメなのだぁ！　ダブルでぬっぷりズルズルなのだぁ！」

リオンが必殺技の決めポーズのように、左手を高く掲げた直後。

トプちゅるクチュるるルっくるるるるっ。

右手だけではなく左手も、股間の三角池に沈め亀頭部分をキュキュっと絞り込んできた。と同時にしっかりと太腿を閉じあわせたまま、腰を僅かに上下させ始める。

ペニスに対する責めがさらに上乗せされ、イキ疲れた少年を限界まで追い込む。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円（税込）

思春期なアダム3
一人泣きの子猫
［小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃］

全国書店で好評発売中

不死の吸血姫がドSのご主人様を募集しているようです
［小説：酒井仁／挿絵：にの子］

全国書店で好評発売中

「当方Mドレイ希望」
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

借金お嬢クリス3
令嬢はいかにして42兆円を返済したか?
［小説：筑摩十幸／挿絵：了藤誠仁］

クリス、悪魔堕ち!?
「愛するジグレット様のため、死んでもらいますわっ!」

全国書店で好評発売中

「…藤田君は責任取るべき」
睦月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

既刊LINEUP
全国書店で好評発売中

- ●仙獄学艶戦姫ノブナガッ! ①〜③
- ●絢爛!帝都少女探偵団 赤い誤踏を撃て!
- ●BLANGEL 輪になって踊る愚者の夜
- ●借金お嬢クリス ①〜②
- ●プリンセスリバース!! 交錯する美姫と魔姫
- ●無敵の姫騎士がM に目覚めたようです
- ●ビルグリムメイデン ①〜②
- ●呪詛喰らい師【カースイーター】
- ●魔海少女ルルイエ・ルル

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!